

毒 不 能 害

「日蓮をあだみにくむことは鎌倉よりもすぐれたり」とは聖人が伊豆の伊東にあつて、御自分でいわれた言葉である。川奈の浜の洞窟に一カ月間も聖人を養い申しあげた船守弥三郎は、聖人が伊東の玖須美に移つてからも、ちまき、酒、干飯、山椒、紙等々の食料品や日用品の数々を聖人へ送っているが、他の人には知られないように十分な心遣いをして品物を使いのものにもたせて行かせたのである。だからいつも弥三郎の使いの者は、聖人に品物をとどけると、どうか、人に知れないよう、世間にわからないようをお願い申しますと、口ぐせのようによいものである。

それというのも、伊東の玖須美や川奈の念仏門徒一同が、とても聖人を憎んでいたからである。考えてみてもわかるが、日本の国が出来てから一回の訊問も取り調べもなく、島流しにされた人はいない、允恭天皇の四十二年（西暦四五三年）軽大女というのが伊予の国に流されたのが、わが国での流罪の始めである。弘長元年に聖人が伊豆に流された時から逆算すると八百年前

のことであるが、もちろん流罪の前に取り調べがあった。罪状がはっきりと日本書紀にのせてあるので、それは取り調べがあつた証拠といえよう。

聖人の伊豆伊東の流罪はもちろんのこと、鎌倉時代の最も信用すべき歴史書たる吾妻鏡には出ておらない。このことからみても、北条一門の私意によって、聖人は流されたと申してもさしかえないのである。当時の執権職北条長時の父たる重時は、極楽寺を建立した程の大の念仏者である。念仏無間、禪天魔の法門は、聖人の鎌倉における大獅子吼であるとともに、献上した立正安国論の所詮でもあつた。北条家は本家は禪宗のかたまり、分家は念仏のちやきちやきというところである。

立正安国論には念仏と禪宗とを信仰すればする程に、災難は増長し、やがては北条一門に同志討ちが始まり、ひいては、この日本国が、よその国から攻められるような始末になるぞと、書かれてあるのである。

さて話は前後するが、聖人が伊豆の伊東に流罪されたことについては、一回の取り調べもなかったと前述したが、北条家の方からいえば、取り調べの必要がなかったのであろう。立正安国論に聖人流罪の咎の数々が挙げられておるといえばいい。北条家からいえば、立正安国論こそ日蓮流罪の調査であるとするかもわからないのである。このような事情で伊豆の伊東に流された聖人であるから、鎌倉よりも人びとの聖人を憎むことは強かつたのであろう。

弘長二年の秋のある日のことであつた。伊東の玖須美の聖人の草庵に、川奈の弥三郎の使いの者ですといつて訪ずれた百姓がおつた。聖人は相変らず書見にいそがしいので、給仕奉公をして聖人につかえておる日興がその応待に出たのである。

「お弟子さまでございますか、私は川奈の弥三郎どんからこれを届けてくれとたのまれて参つたものでございます」

百姓は日興の前に、籠にいれたきのこを差し出したのである。

「おう、これは見事なきのこだが、なんとという名前のきのこでございますか」

「さあ、名前はなんといか知りませんが、川奈あたりの裏山には、たんと今頃になると出来ますでございます。おいしいきのこでございますから、どうか、お聖人さまにたんと食べて下さるようにとのこととでございました。明日食べたのでは味がおちるといふので、夕食前に間に合うようと、弥三郎どんから急がされて、飛ぶようにして持つて参つたものでございます」

「それはそれは、弥三郎どんの何時も変わらぬご親切な御供養、ありがとう存じます。お聖人さまも喜ぶこととでございましょう。だがあんたはあまりみない顔だが、誰方どなたでございましたかなあ……」

「手前ですか、やはり弥三郎どんの知り人でございます。何時も使いに来る奴が、今日は生憎と病気をしましたで、私めが代わりにきたのでございます。ではどうか早く、きのこを召し上つて

下さい。時がたてばたつ程、きのこは味の落ちるものでございます。どうやら大分、あたりが暗くなつてまいりました。これから川奈にまた帰らねばなりません、これで失礼します。どうか、何時もの弥三郎どんのことづけでございます。川奈の百姓が、きのこを持ってきたなどは他言を無用に願います」

「分かった。分かった。何時も何時も弥三郎どんの用心深いこと。念仏門徒の憎しみの厚いこの地のこと、聖人さまはなんとも思つてはおりませんが、守護を承け給わるこの日興は充分に用心をしておるつもりです。どうか弥三郎殿によろしく伝えて下さい」

「ではご免下さい。くれぐれも早く、きのこは召し上つて下さいよ……」
声を残すと、暮かけて浪音の高くなった門外にあたふたと、駈けだしていったのである。

.....

「おい、弥三公よつ」川奈の弥三郎宅に、その夜、夜ふけた頃、酒くさい息を吐きながら、開けひろげた入口から、足許も危ぶなげにはいりこんで来た者があつた。

弥三郎は僅かな油の光りをたよりにして、土間に座つて網のつくろいをしていた。

「なんだい、誰だい。この夜ふけに……」

弥三郎が法華宗に改宗してからは、誰一人も弥三郎を尋ねる人はなかつた。弥三郎夫婦は村人分になつていたのである。弥三郎もまた村中の上原の姓をすてて、聖人からいただいた船守の姓

を名乗つて朝夕に南無妙法蓮華経と唱題修行にいそしんでいるのであつた。

「俺さまさ……随分久し振りだなあ。俺も手前の顔をみないこと久しいが、手前も俺の面をみねえこと幾久しいだろう。どうだ」

「酔つ払いには相手になつて居られない。明日の漁がいそがしいやい……」

弥三郎は顔もあげずに、網のつくろいに忙しかつた。前には村の念仏講の連中が酒の勢いをかりて、よくおどしに來たものだが、聖人が伊東に移り、地頭の伊東八郎左衛門様の病氣を平癒して、聖人の名が高まると、表だつて弥三郎に悪口をいうものは村の中にはいなくなつた。しかし、弥三郎や聖人に対する憎しみが消えたというのではない。かえつて深くなつたのだが、それが表面にはでないだけである。

今夜きたのは珍しいことであつた。

「おい弥三郎つ、手前今夜の夕方あたりから、こうつ胸さわぎがしてねえかなあ」
酔つ払いは自分の胸に両手をあげさげして、ふらついてみせた。

「別に俺は、胸さわぎなどはしねえ。丈夫なものさ、げつぶ一つ出やしねえよつ」

「そうかなあ、そうすましているところをみると、手前の法華信心も口程ではないぞ。胸さわぎがしきりにして、落着いて網のそそくりなぞ出来ねえ筈なんだがなあ、不思議だなあ」

「手前は黙つてきいてりや、先刻から訳の分からねえことをいつてるが、そりや、なんのことだ

い。教えろよ」

「教えろどころが、この夜更けにわざわざ俺は親切にも知らせにきたんだ。驚くなよ、聞いてびっくりだぞ。弥三公っ」

「何をいやる。手前がどんなことをいったって、たとい、川奈の沖で、鯨の四、五頭もつかまえたといったって、びっくりするような弥三郎じゃないわ。早くいつてみる」

「馬鹿野郎、驚けよ。この話にびっくりしなけりや、手前は本当に馬鹿野郎だぞ。いいか、俺は今日、手前の使いの者ですといつてわざわざ伊東の玖須美までかけていつて、日蓮坊主にきのこの御供養をしてきたんだよ。一本くっただけで、ころっといつてしまうという毒きのこをよ。これでも手前はおどろかないと落着いていられるかい」

「ええっ」

弥三郎は思はず立ち上つて網をうしろにほうりなげると、酔っ払いの襟首をぐうつと握りしめた。

「なんだと、そりやつ、手前本当か……」

「そう締めつけられちや、声が出ないよっ。本当だとも、手前がちよくちよく、使いをつかつて、日蓮坊主にいろんなものを届けているのを俺がかぎつけていたんだ」

「このど念仏野郎め、俺が玖須美にじかにいつちや目立つと思つて、日蓮さまに一目あいたいの

もがまんをして、高い賃銀を払って人をやとつてまでして、つまらないものだが、御供養をして
たんだが……」

「痛てい痛てい早くその手を放してくれ、今頃は日蓮坊主は可哀いそうだが、毒きのこを食らつ
て、血へどをはいてお陀仏だろうぜ。夕食に間に合うような頃あいに、俺がもつていったんだか
ら」

「この野郎いかしちゃおけねえ。くたばつてしまえ……」

弥三郎が怒りにもえて、首をしめにかかった時である。

「ああもし、お前さん、そんな手荒らなことをしてはいけませんよ」

女房の声が部屋の中からかかった。

「おお、女房、お前も仔細は聞いたろう。この野郎は俺たちの仏さまを殺した太い野郎だ、日蓮
さまは死んだに違いない」

「まあまあお前さん、その手を放して静かになさいな」

弥三郎が手を放すと、苦痛のために酔もさめたらしいその男は、油あせを額に浮かせたまま、
へなへなと力なく土間に坐つてしまった。

「仏さまがそんなことで死ぬもんじゃありませんよ。五逆罪の中にも、仏さまを殺すという罪は
ないじゃないですか。仏さまというものは人に殺されないことにきまつているんだと、あんたが

私に教えたではないですか。お聖人さまだって、普通の人ならば、きつと死んでいたに違いな
い。あの俎岩で助かっていらつしやる。しかも助けたのはお前さん、あんたじゃないの。毒きの
こをたとえ食べたにしても、お聖人さまがそんなことで死ぬもんじゃない。しつかりしてお題目
でも一生懸命に唱えなさい……」

「そうだ、そうだ。お聖人さまが毒きのこぐらいで死ぬものか、末法の法華経の行者だ。女房、
伊東の玖須美の方にむかつて一緒に唱えようじゃないか、お題目を……」

「あいよっ……」

女房は部屋の上に、弥三郎は土間に、それぞれきちんとすわると、手を合わせて合唱した。

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

南無妙法蓮華経

「手前たちは、どこまで気の狂った夫婦だろう。南無妙法蓮華経と唱えたって、あの猛毒のきの
こを食って助かる筈がねえじゃないか。あれだけ念仏の悪口をたたいた坊主だ、死ぬのがあたり
まえよ」

すつかり酔をさました男が、あざ笑いながらいい放った。

「なんだこの野郎っ……」

弥三郎がおければ、そばから女房が

「お前さん、お題目の最中だよつ、おこる人があるもんかねえ。みつともない」

「おうそうだ……女房、一緒に唱えろよ」

南無妙法蓮華経 ……………

……………

「よさねえか、その手前達の唱える題目で、明日の日まで、あの坊主が生きていたら、俺が手前に負けないくらい、一生懸命に、お題目を、南無妙法蓮華経と唱えてみせらあ」

「本当かつ」

弥三郎はお題目をやめて返答をした。

「お聖人さまは生きていらっしやる。さあこれから手前が本当にその気なら玖須美までいってみよう。どうだ……………」

「面白いつ、そのかおり死んでいたら、それこそ手前も本気で南無阿弥陀仏と唱えろよつ」

「なにをいやがる。法華経の安樂行品というお経には、毒不能害というありかたい文句があるんだ。お聖人さまが死んでたまるものかい。さあでかけよう」

「いいとも」

「女房、お前もゆくか」

「私も行きますよ。この酔っ払いが南無妙法蓮華経と唱えるところがみたいからねえ」